



立入が丘小学校だより



子どもとスマホ

世の中の変化につれ、学校や家庭の子どもへの心配事も変化してきます。近年では、子どものスマホへの関わり方(使い方)が、大きな社会問題として取り上げられています。先日、毎朝の通勤時に聞いているラジオ番組でも取り上げられていたので、その内容を交えてお話しします。

スマホが初めて世に登場したのは1992年。IBMが発表し、94年に市販化されています。今のスマホの原型となったのが96年で、日本で広まったのはiPhoneが国内販売された2008年以降ということです。わずか20年程の間に我々大人にとって生活に欠かせない必需品的な存在となりました。世の中にこれだけ普及したものは、子どもにとっても大きな興味・関心の的となります。ただ、便利さの裏にいじめや人権問題、犯罪への利用、スマホ依存、課金問題など、様々な弊害が指摘されるようになり、子どもをもつ親として、「何歳から与えるべきか」と悩まれている方も多いかと思います。

海外でも子どものSNS利用制限の動きは始まっており、オーストラリアは16歳未満の利用を禁止、インドネシアは16歳未満のハイリスクなSNSアカウントを段階的に停止、スペインは首相が16歳未満のアクセス禁止の方針を表明、イギリスは政府が16歳未満の利用禁止を検討、EU(ヨーロッパ連合)は利用の最低年齢を原則16歳とする決議が行われるといった状況にあります。世界の流れから考えても、子どものスマホ利用に当たっては「何歳で与えるか」「フィルタリングをどうするか」「家庭内でのルール作り」を慎重に検討し、お子さんとも十分に話し合い、説明をし、理解・納得をさせる必要があると感じています。

また、スマホ利用に関連してもう一つ気になることがあります。それは、子どもの読書離れです。全国学校図書館協議会では、毎年5月の1か月間の読書冊数を小学校4年生から高校生までを対象に全国調査しています。その結果によると、2025年度の不読(1冊も本を読まない)率は小学生9.6%、中学生が24.2%、高校生が55.7%でした。過去31年間の小学校の推移をみると1990年代から2010年代半ばにかけて不読率は下がっていますが、それ以降は増加傾向にあります。ラジオ番組では、この要因の一つがスマホの所持率と利用時間の増加で、SNSが常態化する一方で読書時間が減少しているのではないかと指摘していました。確かに1日は24時間しかなく、SNS利用時間が長くなれば、必然的に何かの時間が短くなります。それが読書時間であったり睡眠時間であったりする可能性は大いにあります。国立青少年教育振興機構の調査によれば、読書量の多い人にはそうでない人に比べて「批判的思考力(※)」「主体的行動力」「認知機能」が高い傾向にあると言います。スマホやSNS中心の生活が続くと、将来的にこれらの能力低下などの問題が生じる懸念も出てきます。

このようなことを考えると、複雑化する現代社会の中、子どもたちにどのようなライフスタイルを提供するのが良いのかを考えることは、我々大人に課せられたとても大切な課題であると感じます。



※客観的、多面的、論理的に考える力、自分や他者の意見をまとめる力、コミュニケーション力を包含しています。